

# 弥富市小中学校適正規模検討委員会 会議録

日 時 平成27年7月10日（金） 午前10時00分

【出席者】 吉田 正委員、服部 博委員、東嶋とも子委員、阿部康治委員、清水良男委員、久保良史郎委員、太田重利委員、平野隆雄委員、真野高義委員

【欠席者】 服部正美委員

【オブザーバー】 伊藤昭三教育委員長

【事務局】 下里博昭教育長、八木春美教育部長、五十嵐司朗教育部次長、水谷みどり課長、柴田寿文副主幹、太田高士課長補佐

## ○ 議 事

学校教育課長 それでは、定刻になりましたので、弥富市立小中学校適正規模検討委員会を始めさせていただきます。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、まことにありがとうございます。

ただいまより、第8回弥富市立小中学校適正規模検討委員会を始めさせていただきます。

今年度かわられた委員さんには、委嘱状を机の上にお配りさせていただいております。本来ですと、市長からお一人お一人に交付させていただくのが本意であります。時間の都合上、お配りさせていただきました。何とぞ御了承賜りたいと存じます。

この適正規模検討委員会は会議録の公開をしております。個人名は出しませんが、原則公開させていただいておりますのでよろしく願います。また、会議録作成のため、御発言の際には、マイクを御使用していただきますようお願いいたします。

それでは、次第に沿いまして進めさせていただきます。

最初に、吉田委員長さんから御挨拶をお願いいたします。

委員長 おはようございます。

本日は御苦労さまでございます。

私、吉田正と申します。現在は、名古屋学院大学に勤めております。私の地元は、十四山地区の子宝で、そこで育ち、そこに住んでいるということで、今回の会議の司会をさせていただくことになりました。本年度で3年目ということになります。この会議の終了が3年間で結論を出して、市長に答申することになっておりますので、今年度の委員の皆様方が最終的な結論を出すことになると思いますので、これからよろしく願いたいと思います。

学校教育課長 ありがとうございます。

次に、本日は、本年度最初の会議でございます。かわられた委員の方もお見えになりますので、委員紹介をさせていただきます。お手元にあります委員名簿の順に紹介させていただきます。

それでは、学識経験者で選出され、委員長をお願いしています吉田正様。

委員長 吉田でございます。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 本日、欠席されておりますが、学識経験者で選出され、副委員長をお願いしています服部正美様。公募委員の服部博様。

服部(博) どうぞよろしくお願いいたします。委員長と同じ、僕も3年目でございます。

学校教育課長 同じく公募委員の東嶋とも子様。

東 嶋 東嶋です。どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育課長 以上の皆様は、昨年度から引き続きの委員の方でございます。

次に御紹介させていただく皆様は、充て職の方で、本年度から委員になられた方でございます。

区長会代表で区長会長の阿部康治様。

阿 部 阿部です。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 同じく区長会代表で、区長会副会長の清水良男様。

清 水 清水です。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 保護者代表で、弥富中学校PTA会長の久保良史郎様。

久 保 本年度、委員になりました久保です。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 同じく保護者代表で、十四山中学校PTA会長の太田重利様。

太 田 おはようございます。どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育課長 学校代表で校長会長の平野隆雄様。

平 野 よろしく申し上げます。

学校教育課長 同じく学校代表で、校長会副会長の真野高義様。

真 野 よろしく申し上げます。

学校教育課長 以上、10名の方が委員でございます。

続きまして、オブザーバーとして、教育委員長の伊藤昭三様。

伊 藤 伊藤でございます。オブザーバーということで勉強させてもらいたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育課長 事務局として、下里教育長。

教育長 お世話になります。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 八木教育部長。

教育部長 4月から、教育部長を拝命しております八木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育課長 五十嵐教育部次長。

教育部次長 2年目となります。よろしくお願いいたします。

学校教育課長 学校教育課、柴田副主幹。

学校教育課副主幹 よろしく申し上げます。

学校教育課長 太田課長補佐。

学校教育課長補佐 よろしく願いいたします。

学校教育課長 そして、私、学校教育課長の水谷でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。  
それでは、議事に移らせていただきます。  
進行につきましては、委員長の取り回しでお願いいたします。

委員長 それでは、これから議事に入っていきたいと思います。  
趣旨説明をこれまでの経緯を含めまして、御説明をお願いします。

教育部長 私のほうから、趣旨説明ということで御説明を申し上げます。  
当初からの委員さんにおかれましては再確認ということ、また新しい委員さんにおかれましては、今後、御意見をいただく際の参考にしていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

平成25年4月に日の出小学校が開校しまして、それまで市の懸案事項でありました桜小学校の過大規模校が解消されました。現在、市内の小・中学校の状況は、小規模校が5校、適正規模校が3校、大規模校が3校という状況であります。現在、全国的な少子化によりまして児童・生徒数が減少しており、本市におきましても、現在1学年1クラスの単学級の学校が、小学校8校のうち4校、また中学校におきましては3校のうち1校が1学年2クラスという小規模校でございます。将来的には、各学年が単学級になるという見込みでございます。

これにつきましては、本日お配りしてあります資料の後ろのほうに多分つけてあると思いますが、A4の縦のカラー刷りのものをごらんいただくと、直近の児童・生徒数、学級数をお示ししてございます。中でも、栄南小学校におきましては、将来、児童数が100名を割り、十四山中学校でも、平成38年、将来予測でございますが、生徒数が100名を割るという予測をしております。これについても、今度はA4カラーで横刷りのもので将来予測の表を示しておりますので、参考にしていただきたいと思います。

市といたしましては、少子・高齢化が進む中、市内の小・中学校のあり方について検討していく必要があると判断しまして、平成25年7月24日にこの適正規模検討委員会を組織したところであります。現在、それぞれの教育環境に応じて、充実した学校教育ができるよう努めておりますが、少子化の波は、児童・生徒の集団活動という観点からも多くの影響を及ぼすことから、学校規模の適正化が課題となっているところであります。

この学校規模適正化につきましては、地域的な特性への配慮や、児童・生徒にとって望ましい教育環境の構築という観点から、保護者や地域の皆さんを初め、多くの方の意見を聞きながら検討していくという必要が出てまいりました。

この委員会につきましては、学識経験者の方、地域団体代表の方、保護者代表の方、学校関係者、公募による市民代表の皆様10名による委員構成でございます。学校生活や学校運営などのに関する諸問題を解決すべく、学校の適正規模について検討するために、この委員会が設置されたものでございます。具体的には、学校規模の配置や適正化に関する基本的な考え方を本年度末までにまとめていただくこととなります。

以上で、本委員会の趣旨説明を終わらせていただきます。

委員長 ありがとうございます。

この委員会ができた趣旨ということでございますけれども、何か御質問はございますでしょうか。

(挙手する者なし)

委員長 よろしいでしょうか。

私と一緒に3年目に突入した2人の委員の方、何かつけ加えることがありますか。よろしいですか。

(挙手する者なし)

委員長 それでは、何かありましたら、また後ほど説明をしていただきたいと思います。御質問いただければと思います。

引き続きまして、これまでの経過を御報告いただきたいと思います。

学校教育課長 では、経過報告をさせていただきます。

25、26年度あわせて報告させていただきます。

平成25年度では、小学校については、学年1クラスの小規模校はクラスがえがなく、人間関係が固定化されやすいなどのデメリットはあるが、子供たちへのきめ細やかな指導ができるなどのメリットを生かし、当面は統廃合を考えないこととしました。また、中学校については、学習面、生活面、学校運営面、財政面、その他の4点から検討を行い、大規模な中学校は一人一人の把握が難しく、生徒指導などに支障が出るおそれがあるので望ましくないという結論づけを行いました。このことにより、中学校の大規模校から小規模校への通学区域を見直すことによって、再編成をする方策が提案されました。

26年度においては、25年度の提案をもとに3回委員会を開催しました。中学校について、一部地域を変更した場合、また生徒数の将来動向を踏まえたシミュレーションにより検討した結果、東平島の生徒を十四山中学校へ、三百島の生徒を弥富北中学校へそれぞれ移動させた場合が数上ではバランスのとれた形になり、十四山中学校のクラスもふえることによって、学校運営を行う上でも理想的な規模になる。

しかし、中学校区の見直しをただけでは、生徒、保護者、そして地域の関係者の理解を得るのは難しい。また、現在、コミュニティーの事業は小学校区単位で行われているため、変更した地域の生徒は、実際の住所地のコミュニティーとは違ったコミュニティーの事業に参加することになる。その問題を解決しない限り、再編は難しい。そのためには、既存の十四山中学校の設備、施設、それから教育内容も含めた人材、そういうものを充実させ、全く新しい学校をつくり、魅力のある中学校にして、そこに行きたいなあと思えるような中学校にしていくということが前提になると思われる。また、校名を変えることによって、既存のイメージを払拭する必要がある。ただ単なる数字の数合わせというところが再編成にならないようにし、子供たちにとって学びがいのある、頑張ろうという気持ちになるような環境をつくらなければならないとの議論が交わされました。

今後の課題としては、中学校区の見直しに向けて、生徒、保護者、学校関係者、地域住民、関係団体等の理解と協力が不可欠であり、地域及び関係機関等との十分な協議を

行うこと。魅力のある、特色のある十四山中学校にするために、施設、設備、教育内容の向上といった教育環境整備に努め、新たな校名を検討すること。通学する中学校がかわった場合、3学年が一度に動くことになると考えられるため、どのタイミングで行うか、またかなり前から周知をして準備をしていかなければならないこと等の御意見をいただいているところでございます。

また、昨年度、第7回検討委員会で、東平島の関係者の意見を聴取するという御意見がありました。その後、4月26日の日曜日に、平島学区の区長、区長補助員の方々の集会があり、その場でお聞きすることができました。主な御意見としましては、平島は東西で一つであり、東西平島を分けることは無理である。日の出小の全員が十四山中へ行くなればよいと思う。まず、十四山中の施設を改築、校名変更する必要があると思う。十四山地区を市街化区域にすれば、家も建ち、人口もふえるのではないか。保育所の区域から見直しをするべきではないか。平島を分けるのではなく、大藤小と栄南小が十四山中へ通学すればよいのではないかという御意見がございました。

25年度、26年度の委員会経過報告をあわせて報告いたします。以上でございます。

委員長 ありがとうございます。

先ほども、課長のほうから報告があったように、今年の最終的な結論といたしますか、東平島を十四山中学のほうに、その子供たちを中学校に行かせるということで区長の会合で提案して、それを聞いてみるというところでございました。そこで話し合われたことが、先ほど課長が言われたようなこととございまして、東平島だけじゃなくて、区を割らないで、平島が全部移るならやってもいいぞというような話ですけれども、やってもいいぞと多分その方がおっしゃっても、できるかどうかわからないことなので、本当に部分的に移動するということはなかなか難しいと。

ほかの市のことも、ちょっと私も知り合いがいるものですから聞いてみたんですけども、そういうことをやっている市は結構あるんですね。同じ小学校に通っていた子が、中学校は違う中学校に通うということはあるんです。だから、どうしても、このあたりというのは、そういうつながりが強いということもあるのではないかなあということをおもいます。

今回はもう最終的な結論を、きょうと次の会、あともう1回の会でまとめなきゃいけないということでございますので、忌憚のない御意見を先生方からいただければいいのかなあと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

今の経緯についての御説明でわからなかったところとか、何か御質問があればどうぞおっしゃっていただきたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。大体、今の経緯でよろしいですよ。どんどん意見を言ってください。

委員 私、分離のときに桜小学校でPTAをやっているんですけど、実際、桜小と日の出小に分かれるときに、個人の方からいろいろ意見を聞いたんですけど、もうその時点で結構無理があったんです。実際、日の出小の南側の、いわゆる中山と川原欠の子は、日の出小学校を見ながら桜小学校へ来ているわけですよ。その時点のときの問題はクリアされていないみたいな感じで、それからコミュニティーに関しても、桜学区と日の

出学区のコミュニティーはいまだに分かれていない。これもまだクリアしていないですよ。当然、数合わせをしようと思うと、こういう形になると思うんです。この案5で合っているんじゃないかなという気はします。

先ほど、同じ小学校で違う中学校へ行くというのは、私の知っている限りでは、三重県の菰野町にあります。菰野に1,000人近い桜小規模の小学校が1校ありまして、そこが半分に分かれて、違う中学校へ進むみたいです。四日市にもあるそうです。そこの保護者の方に話を1回聞いたことがあります。菰野町にはあるというのを聞いています。

いろいろ案があったんですけど、例えば、その案の中に十四山中学校を全員弥富中学校へ行くという案はなかったんでしょうか。

委員長 その件につきましては、そうなると弥富中学校が過大規模校になる可能性がある。だから、過大規模校をなくそうということから始まってまして、小規模校をふやそうということじゃなくて、過大規模校にしないようにしようという流れが最初の年度の委員会ではあったんですね。ですから、手っ取り早く言えば、それで済むかもしれないけれども、教育的ないろんなメリットを考えると、3つの中学校が存続したほうがいいんじゃないかなという流れに来ております。

津島のほうでも、何かそういうところがございますか。小学校のところが違う中学校に行くというのがありましたよね、この地域でも。

教育長 管内の話させていただきますと、津島の南小学校というところが、暁中学校という新設の分離校ができたんです、天王中学校の。その南小学校が天王中と暁中学校へ分かれて通っているのは事実でございます。

委員長 でも、そう割って移動するというのは、保護者、地域の人たち、区長さんの反対が多いということがございますので、なかなかそのところは決断できないというのが現状ですね。

要するに、大規模校はしょうがないんだけど、過大にならないようにという目的があって、過大になってしまうと、教育上、いろいろ目が行き届かないところが出てくるんじゃないかというところの危惧があるということで、そういう話で動いているということです。

そのほか何か、どういう御意見でも結構でございますので、本当に何かこの2年間やっていて、意見がいろいろ出尽くしたということもございますが、新しい先生、新しい委員の方々がいらっしゃいましたので、思いつくところ何でも結構でございますので、どんどん意見を言っていただければと思います。

委員 今回の平島地区の件なんですけど、それはもう結論という形、一意見というのか。  
（「意見という形になります」の声あり）

委員 意見。区長会、大変有意義な団体だとは思いますが、その方の年齢であったり、組織の年齢層が、私のイメージで物を言っただけとはいけないんですけども、恐らく年配の方々、ずうっと弥富に住まわれて、地域を愛されて育った方々だと思うんですけども、実際の、今小学生の親御さんであったりだとか、この表にあるように、幼児のいる世代の方の意見なり、そういったことを反映されている、取りまとめた区

長さんの方々の、実際にアンケートをとっただとか、各個別にこういう話が市のほうからあるんだよと。取りまとめたものを区長会の中で御発言されたのか、地域に対する愛情はそれぞれ皆様お持ちだと思えるんですけども、その熱い思いを、平島地区を東西分裂するなんて言語道断な話なのか。やっぱり市としての方向性に対して、100%御賛同があるのか、過半数であればいいのかどうかということをお聞きしないと、将来においてしこりを残してもいけないと思えるんですけども、そういった位置づけのところなのかなと思いました。

委員長　そうですね。そのことについて、教育長のほうから。

教育長　今、平島の行政区、20名ほどからの区長さん、区長補助員で成ってまして、9割方が新興住宅の方で若い方が多いです。この意見としては、今の区長さん、区長補助員の皆さんの意見をという形の中ですから、市民、区民の皆さんの意見を集約したものではございません。あくまで、参考として私どもが意見聴取をしたということでございます。よろしくお願いします。

委員長　全体の意見ではないということですね。

そのほか何かございますか。

委員　十四山中学校の立場に立って言いますと、やはりだんだん生徒数が減ってきて、今一番問題になっているのは部活動のことだと思うんですね。もともと十四山中というのは部活動は少ないです。男子は野球とバレーと卓球でしたか。

(「そうです」の声あり)

委員　女子は、ソフトとバレーと卓球、運動系はそうですね。ところが、近々、特に1・2年の秋の新人戦では、例えば野球部とかソフト部の登録人数が足りなくなってくるというようなことも起きるそうです。中小体の規約によると、隣接の学校と合同チームをつくって出るとは可能なんですけれども、それでは学校代表として一生懸命やろうという気持ちは薄れていくし、やっぱり一つの学校で一つのチームを出したいのはどこも一緒だと思うので、その部活動の件。

それから、今は再任用だとか非常勤講師の先生がいて、9教科の専門教科の先生がみんないるんですけど、たまたまなんですけどね、今は。だけど、教員の定数というのは、児童・生徒数とクラスによって決められていくので、小さい学校というのは、例えば技術の先生の専門教科の先生がいないことがあるんです。そんなときには、免許外申請を出して、違う教科の先生がその教科の指導を行うというようなこともあるわけで、十四山中もかつてはそういうことをやっていました。

ですので、そんなことを考えていった場合、やはり弥富中や北中、十四山中が適正規模になるような方向が望ましいんですけども、やっぱり地域の人、保護者を説得させることが難しい、これはもう間違いないと思うものですから、十四山中の施設設備をよくしていくことはやっていかなきゃ、説得できないと思うんですね。特に、十四山中は、多分体育館がかつては村の体育館で、今は市になっていますが、中学校としての体育館がないので、これはつくってほしいなあと思うんですね。

私も、実は平成17年、十四山中の教頭としておりましたのでわかっていますけど、決

して十四山の学校の設備施設は悪くないです。旧弥富町と比べてみても悪くないんです。ところが、今の弥富中や日の出小のような最新の施設設備はないので、やっぱりその部分で保護者、地域の人を説得するのは難しいなあと思います。

ここに書いてある教育の内容とか、人材とか、これは決して、今の十四山中は低くないです。みんな一緒だと思うんですけど、施設設備面では劣るので、例えば体育館を新設するだとか、ここに書いてあるような防災の関係のことも書いてありましたがけれども、魅力ある環境をつくっていかなくちゃあ、4月の区長さんの意見のように、なかなか説得できないところがあるんじゃないかなあと思いました。

委員長 ありがとうございます。

先生がおっしゃったような御意見もかなり以前は出ておまして、体育館がないと。武道場もないんですね。武道は必修ですので、今は。そういう意味では、本当に設備が足りないということは思います。

委員 私、実は毎朝、1号線沿いにちょっと立っておまして、子供の登校指導をしておるわけですが、そんな中で、1号線は、本校の弥富北中学校は南から北へ上がる。そして、十四山中学校の生徒は北から南へ、すれ違うんですね。どこかでそういう区域があるのでわかるんですけど、小学生も大きなあの1号線を渡っていく姿を見ておりますと、もう少し安全で登校できるふうにならないかなあというふうに感じております。

例えば、かわりますと、小学校から上がっていく友達が中学校にいないからとかいうことを言いますが、やっぱり違った小学校同士が集まってきて、中学校で新たな新しい集団ができますので。決して、少数でというふうにはならないんじゃないかなあと思っております。ただ、親御さんからしてみますと、いろんな不安を抱えてみえるなど思いますが、入学前に、例えば弥北中の学校を見学できるとか、十四山中を見学できるというような不安を取り除く小・中連携をもっと広めていったらいいのかなあと思います。

それから、私ごとですが、私は中村区に住んでおまして、中学校が11クラスの豊正というところに住んでおったんですけども、豊正中学校は、岩塚小学校というところからも来ています。その岩塚小学校というところは、御田中学校、隣の中学校と分かれて来ていますが、ほんの一部なんですけれども、一緒に友達があります。隣同士なものですから、割と色々な形で、今も中学校時代の人たちともつき合いがありまして、小学校が違うからとか、そういうことは、当時からはなかったように思いますが、みんな仲よくやっておりました。一部の子供さんにしてみれば、ちょっと最初は不安があるかもわかりませんが、できたらそういったことも考えてやっていただくとありがたいなあということを思います。以上です。

委員長 ありがとうございます。

実際の現場の先生方にはいろいろな思いがあるかと思いますが、私も同じ小学校の子がずうっと同じように中学校も同じところというところで今まで育ってきているわけですね。それが分かれることによるメリット、デメリットというのはいろいろあ



と思うんですけれども、これから実際に社会に出ていったときに、どちらがメリットがあるかということ、本当に教育上考えなきゃいけないと思うんですよ。もう国を超えて、今いろんな中小企業の80%、90%が海外に出ていっておるわけですので、そんな地域の小さなことにこだわっていると、将来大きな人間ができないと個人的には思っているんですけれども、我々は答申をするということでございますので、そこまでのある程度の決断をして、答申をしなければいけないという腹はくくっていると私は考えております。

ですから、先ほども、区長さんも自分のテリトリーの地域の住民の方のことをお考えになって、いろいろお話になっていると思いますけれども、やはりある程度英断をしなければ変わっていかないかなあと。それと、違う人たち、これまでお付き合いしたことない人たちとまじり合うことよってのメリットのほうが私は大きいと思うんですけれど、教育上は。そのあたりをどうお考えになっているかということでございますけれども、区長さんもいらっしゃいますので、ちょっとお話をいただければと思います。

委員 私は平島ではないですので、その辺の気持ちはよくわからないんですが、僕は栄南小学校の卒業生でして、僕が小学校、中学校のころは、特に中学校ですが、飛島中からうちは1キロも離れていないところにあるんですが、飛島中から離れて、十四山中学校を見ながら弥富中学校に通いました、3年間。約7キロです。

子供の立場で考えると、なぜ近い学校に行けないのかなというのをずうっと思っていました。なので、本当は十四山村と弥富市が合併したときに、十四山中学校に近い地域の子供たちが十四山中へ行っていけば、こんなことは起きないわけですよ。本当は、飛島村も合併していれば、もっとこういう話が進みやすいと思うんですけれど、でも弥富市になったので、今まで弥富町の中で、弥富町だから弥富中学校、弥富北中学校へ通っていた生徒たちが、弥富市になって、十四山中に近ければそっちへ行ったほうが毎日が楽ですので、間違いなく、子供たちにとってはいいと思います。これは僕の考えです。区長としての考えではありません。その点よろしくお願いします。

委員長 大事なことだと思います。

委員 私は、弥生学区の区長ですけれども、生まれ育ち全て学区内で、離れたことがありません。その経過の中で、昔は弥生小学校が一つだけであって、それが桜小学校ができて、小学校の仲間の一部が途中から消えたといいますか、そういうことは個人としては経験しております。それから、小学校の低学年のときに、市江村との合併がありましたですね。そのときに、やっぱり少数の生徒が小学校2年生のときに弥生小学校へ一緒に通学するようになりました。また、中学2年のときには、現在日の出があるところに新しい中学ができて、そこでは鍋田地区と両方が1つの中学校で学ぶということ、個人としてはそういった経験がございました。

今回、資料をいろいろ読ませていただいたんですけれども、生徒数が多いところを少ないところへというような方向づけの議論が続いているように思うんですけれども、十四山中学校の地元としては、クラス数をもっとふやしてくれという地元の要望とか、そういったあれはどうなんでしょうね。現在のままでいいのか。合併する前がどうだっ

たかということから、合併したからということもありますので、そういったところがちょっときょうになってもお聞きできないんで、その辺もちょっと参考に聞かせていただけたらと思います。

委員長　　じゃあ、そのことについて教育長のほうから。

教育長　　日の出小学校を、桜小から分離校をつくる以前に、十四山校区へいろいろ説明会に入りまして、その集約的なものが、過去は十四山中学校は学年4クラス、ピーク時ですね。今、2クラスなもんですから、その学級数に戻してほしい。それには、住宅開発を、全地域が調整区域なもんですから、そういう要望が大半でございました。今のままではよくないという認識は皆さん持ってみえました。以上でございます。

委員長　　十四山中学校の人たちからは、もっとふやしたいという要望があったんですか。

教育長　　はい。

委員長　　あったんですね。何かそのことで。

委員　　私は十四山地区に住んでおりますので、今のところの話は本当に子供さんだけでなく、親御さんのほうも、もう少し学校の規模を大きくしてほしい。現在は、クラスがそういう状況になっているので、クラブ活動が非常に困難になってきているということも現実に今ありという問題は、十四山側では出ています。

全体的なことで、ずうっとこの3年間こういう話し合いが来ているんですが、子供がどうだろうとかいう話は今出たんですけど、実はちょっとあることで、今度、十四山のコミュニティーの一つの活動があるわけですけど、そこに十四山地区じゃない中学生の子も参加してもいいから来ないという、ちょっと呼びかけをしたあることがあったんです。そうしたところ、そこに、ほかの地区の中学生の子が自分の意思で参加するというのをいたしました。学校からとかじゃなく、個人的に十四山地区の活動に行ってもいいよというふうに手を挙げてくれた子が今回あったんですね。

なので、大人が思う以上に、そう思っていることよりも、子供たちは、要は、自分が子供だとすると、十四山中が今のままだったら、やっぱりそのまま十四山中に行くのはと思うと思うんです、もしほかの学区にいたとしたら。だけど、去年からの議論の中で、改築をするとか、お金を考えなかったら全部新築してほしいという話まで出たぐらい、ほかの学校になって、当然、学校の名前も十四山というのじゃなく、弥富全体の中の一つの学校、去年は弥富東中学でもいいんじゃないかという話も出たと思うんですね、東西南北。そのように名前を変えてやって、先ほど区長さんたちもおっしゃったように、途中からかわることというのは、その時点ではということ、子供たちって、意外とその辺は受け入れられると思うんです。

それより何より私が心配しているのは、十四山地区の中学生と弥富北中学校の生徒さんが交差して登下校しているところが、実は1号線とおっしゃったんですけど、その先に近鉄があるんです、近鉄の踏み切りが。場所を言いますと、キンブルがありますでしょう、ピアゴのところの、あそこを入ったところなんです。そのところというのは、歩道もないですし、自転車に来ていて、車がすごく多いんですね。本当に、あそこはいつも危ないということがあって、もちろん学区だからしょうがないんですけど、今の十

四山地区の人、三百島というのは近鉄の北側にいる。それこそ、ふと見ると弥北中がすぐ見えるところに住んでいる方たちをという案が去年出たんですけど、交通安全というのは物すごく大事だと思うんです、子供たちが毎日登下校するときに。

中学生になると、日の余り長くないときだと夕方になってしまうと危ないということもあったりするので、私たち大人が考えるというよりも、やっぱり子供目線、子供の将来とか、その子たちの勉強する場所をちゃんと考えるということをやっぱこの会では答申していきたいと思うんです。もちろん、これが通るとは思っていません。地域の方の反対もあると思います。でも、せつかくこの会をやっているんだから、子供の目線で考えていきたいと思います。

委員長 ありがとうございます。

委員 大分深まってまいりましたので、もうちょっと具体的に、意見を2つほど述べたいと思います。

先ほど、数が多い少ないという、小学校から中学校へ来た場合、触れられたと思うんですが、印刷物の平成32年度のところ、最後ですね、リストのところ、32年度ですが、その十四山中学校を見ますと、そのまま行きますと139名なんですけど、移動、変更をしますと、110名加わりまして249名になると。案5のほうを今見ておりますが、139名に対して、上げるのは110名ふえますので、もともと十四山中学校地区から上がってきた生徒数と、移動してきた新しい生徒3学年ですが、110名おりますので、合計249名ということで、そんな優劣がないと思ひまして、溶け込みが、中学校1年生の最初から半年ぐらいたちますと、大分打ち解けてくるんじゃないかと私は思っております。

それから、さらに詳しくなるんですけども、遠回りして、最終的に私の結論に至りますけれども、私の経験と知見なんですけれども、もし万一堤防が決壊して水が浸水してきた場合、私の伊勢湾台風の経験と国土交通省の国土地理院地図電子国土ウェブによりますと、伊勢湾台風時の水位の最高は2.5メートルと私は見ております。これを当てはめますと、弥富市役所の前の道路はマイナス1.3メートルです。これを合わせますと3.8メートルになります。だから、弥富市役所の前の道路は、伊勢湾台風時は3.8メートルぐらいいまで海水、水位は来たらろうと私は見ております。これは、海拔じゃなくて、標高という考え方ですね。そこに、また時期によっては高潮、それから地震があれば地震、それから南海トラフの大地震があれば津波、液状化というのが加わりますので、さらに3.8メートルよりふえるだろうというふうに予想をしております。

このような私の想定から考えますと、グラウンド、十四山中学は広いということを知りました。先ほどの国土地理院のコンピューター上で当てはめると、マイナス1.3メートルとか、マイナス1.5メートルとか、いろいろ出てきます、広いもんですから。あのグラウンドは真っ平らではないというように思ひます。校舎に近づけばマイナス0.3メートル、マイナス30センチくらいということですが、グラウンドはマイナス1.5メートルという十四山中学校ですね。

そこに、3階ではなくて、4階に多目的ルームを設置する。昨年度、弥富中学校さんを訪問させていただきまして、パンフレットをいただきました。その中に、ぴかぴかの

多目的ルームというのを2階につくっておられます。2階や3階ではなくて、4階というところが一番の売りなんです。2から3教室分ぐらい、廊下はありませんので、横も広いと思います。その広さにして、堤防が決壊したときの避難場所としても活用できるのではないかと思います。また、学年集会とか、学年保護者会とか、その他、簡単な運動とか、さまざまに応用できると思います。

最大、学年を3クラス、ずうっと年度を追ってきまして、最大9クラスで、過去はもっと多かったんで、普通教室は余っているだろう、余裕があるだろうということですので、そういう学年ごとの集合とか解散も容易であろう。体育館と言わずに、弥富中学校は屋内運動場と言っておりますけど、そこにわざわざ集まらなくても、ここで任意集会、集合ができるんじゃないかということで、一つの考え方として、増築、4階に多目的ルームを設置する。その外の外階段を使って、平島東の方も、避難時にそこを中へ入れるという。生徒は校舎の中を動けばいいわけですが、そんなことを最近思っております。以上です。

委員長 ありがとうございます。

本当に、3年間御一緒させていただいて、いつも斬新なアイデアをいただいておりますけれども、防災の観点というのは初年度もございましたよね。栄南小学校を見せていただいて、あそこの上のほうに、そういう避難所ですか。

委員 避難場所。

委員長 避難場所ですか、我々行きましたよね。

委員 あれは栄南小の屋上ですか。

委員長 屋上ですかね。高いところ。

委員 弥中じゃない。

委員 いやいや、弥中も見学に行きましたよ。

委員長 そういうようなものがあって、やっぱりずうっと子供目線では考えているんですよ。だけど、もう改めて、やっぱり我々のこの会議というのは、もうそこをベースにして考えていかなければいけないということで、またちょっと考えさせられました。

今の御意見に対して、何か賛同意見だとか、これはこうじゃないかというのがございましたら、またお願いしたいと思います。

委員 私も十四山で生まれ育ちまして、今48歳になりますので、30年以上たつわけなんですけど、非常に平凡な地域というのは、皆様御承知かと思うんですけれども、その時々、行政が主導であったのかちょっとわかりませんが、地域が変わっていったのか、どうだったんだというときには、それぞれお子様の時代に、子供としての思いを今おっしゃられたことかなと思うんですけれども、そのときの親御さんの方々がどういう思いだったのか。我々でいうと、親御さんであったり、地域の代表的な立場で意見を述べさせていただいているんですが、来年から変わるという話ではないと思うので、例えば5年後にこうこうなるんだよというふうな提案があったときに、もちろん賛否それぞれあると思いますが、今絶対に嫌だよという方がいるかもわかんないですけども、5年後という、もちろん中学1年生の子も卒業していくわけで、言い方はあ

れですけど、私たち関係ないや、2年後、兄弟がいれば別ですけども、そうやって変わっていくかもわかんないねという、ある種、コミュニケーションが浸透していくと、ああもうしょうがないのかなという意見も出てきたりだとか、そういうこともあって、地域に対する思いが熱いとか、そういったことがいいとか悪いとかじゃなくて、こういう時代になったんだと。

町村合併して何か変わったのと言われると、恐らく村が市になって、町が市になったぐらいで、そんなに特段変わっていないと思うので、やっぱり何かの形で英断されなきゃいけないのかな、その矢面に立つ方々はもう大変すごくエネルギー使うと思うんですけども、時代の流れというふうな売りでしかないのかなあという感じで、日の出小学校ができる以前に、私の知り合いで東平島に引っ越しをされてきた方がおまして、こちらの桜小学校に通わなきゃいけないんだということで、先ほどもあったように、すぐ目の前に十四山西部小学校があるのに、何であんなところまで行かなきゃいけないのという素朴な疑問というか。生まれ育ってずうっと弥富にいる方も弥富市民でありますし、きのうぽっと来た人も市民なんですよ。なので、そういったことも配慮したり、考えていかなきゃいけないのかなあという思いはしております。

委員長 ありがとうございます。

先ほどの英断をしなきゃいけないというところなんですけど、我々の委員会は、理想論をやはり追及していかなきゃいけないと思うんです。これをどこで最終的に決めるのかわかんないんですけど、議会で決めるんですかね、教育委員会で決めるんですか、どうなんですか。

教育長 学校の設置については市当局です。通学区域の設定については教育委員会でございます。

委員長 ありがとうございます。

市というのは、結局、市長さんが最終的には責任ということで、それは議会を通さなきゃいけない形になりますね。

(「議会を通らないと」の声あり)

委員長 そのときに、いろんな意見がまた議会でも出てくるわけなんで、その後押しができるような、内側のこういう委員会でこういうことの結論を出したんだよというものを出していかないと、何をやってたんだと言われかねないんですよ、この会議は。ですから、この3年目の委員の皆さんは非常に責任が重いと思っていただければいいかなと思います。

委員 ちょっと私が経験したことなんですけど、私、昭和43年生まれで、ずうっと弥富町で桜学区から弥中で暮らしてきたんですけど、中学校で実は同窓会の幹事をやったことがあって、その後、旧海南高校でも同窓会の幹事をやったことがあるんですよ。ちょっと関係ない話かもしれないんですけど、先ほどから、小規模校のメリットのことは結構出ているんですけど、デメリットって出ていないんじゃないかなあという気がするんです。デメリットは、部活動ができないとかというのがあったんですけど、一つすごく感じたことがあって、同窓会に出て、圧倒的に小規模校の子は出てこなかつ

たです。なぜかというふうに理由を尋ねると、小学校のときのほうがおもしろかったから、中学校のときのほうがおもしろかったからという意見です。

僕なんかは、もともと弥中に行く前に、桜小学校でも規模が大きかったんで、弥中に行ったときに何とも思わないんですよ、まじってね。それってどうなのかなというのもありまして、今、中学校の再編成で議論が交わされていますけど、もうちょっと早い段階で、小学校の段階で、十四山西部小学校に、それこそ平島東の子が行ってもいいんじゃないのかなあという。早い段階にまぜていけば、全然子供としての負担は少ないですよ。なので、小学校なんかは6年間あるんで、今から1学年ずつでもずうっとまぜていけば、コミュニティーの問題だとかというのもじきに消えていくんじゃないのかなという気はするんですが、地元の負担も少ないと思うんですよ、1年生からまぜていけば。そんな感じはするんです。

委員長 そのことについては、過去にいろいろ経過がありまして、御説明いただけますか。東平島がうまくいかなかったんですよ。

委員 後で、事務局さんのほうで話が出ると思うんですけど、要は今のお話で、飛島村も一緒のほうがよかったと、みんなそう思っていると思うんですが、合併協自体がすごく時間が短かったんですね。蟹江町とのことがだめになって、2つになって、もう一回やろうといったときに、本当にぎりぎりの状態で、要はその議論を入れる状況ではなく、合併調印という形になった。だから、本当はいけないんですけど、そのときにやっていけばよかったんですけど、政治的にできなかったという現実もまず一つあります。

その後、平島の西東に分かれる話は、私も1年目のときにお話しさせていただいたんですけど、平島の子供会に呼ばれて、子供会の活動をしたことがあります。そのときに、その平島の人たちの話は、私たちは近くに十四山の小学校があるので、そっちへ行ってもいいなあと思っているんだけど、十四山のほうが来るなど言ったというふうに平島のほうは言われるんです。なので、十四山のほうがじゃあそういうふうに言ったかなと思って、十四山の小学校の親御さんたちに聞くと、小学校のほうでも、いや来てくれたほうがいい、ある程度大きい学校というか、人数ふえたほうがいいねと言っている親御さんも、全部じゃないですよ、もいるので、要はどっちにもいるということですよ、どこまで行っても。

だから、どこかで線を引かないといけないと思うので、今の小学校からやろうということは、毎回やっても、やっぱりコミュニティーの方々になかなかその辺が難しいと。それより何より今一番問題なのは中学校のほうの大規模校のほうに指導といっても、特にいじめとか、とてもすごい大きな問題は、どうしても生活指導の面で大きくなってしまっているので、まずはそこをとめたいということと、弥富の規模からすると、中学校が3校ぐらいがやっぱり適切ではないかという議論の中で、まず中学校のほうだけでも何とかしようという話になったと私は思っております。あと事務局さんのほうにお願いします。

委員長 お願いします。

教育長 ほとんど委員のおっしゃるとおりでございまして、さまざまな意見がありました。最終的には、小学校はデメリットはあるが、メリット面を生かして、当面いわゆる複式学級という、2学年で1クラスという形になるまでまだ少し余裕があるんじゃないかという総論に達しまして、中学校のほうに目をつけました。今、弥中は大規模校、北中が中規模、いわゆる標準規模、学年4クラスから5クラスと、十四山中学校は小規模、1学年2クラスですから、その3中学校の地域バランスはいい。生徒数からいくと、北中のバランスが一番いいもんですから、いわゆる標準規模校を3校のバランスでいく方向で調整ができたらなという形の中で結論づけがされております。以上でございませう。

委員 この適正委員会で推す意見ではないんですが、将来的に私が主に有効じゃないかと思っているのは、愛知県にごく近い県のある地区で、調整地区というのがございませう。ある地区とある地区の重なっているところ、ある地区在住の生徒はA小学校へ行ってもいいし、Bという小学校へ行ってもいいという、距離からいってですね。調整されるわけです。それをいつ行ってもいいかというんじゃないくて、小学校1年生に上がる入学前に、私はB小学校へ行きたいですよ、私はA小学校へ行きたいですよというふうに希望を出すわけです。その調整地区に入っている人は、希望で選べるという学区といいませうか、市もあるようです。

それを当てはめませうと、東平島の小学生になろうという皆さんは、十四山西部小学校が近いからうちの子はこちらへ行こうと、東平島でも日の出小のほうが新しくていいといえば、そちらのほうへ行くというような、コミュニティー活動云々という以前の学ぶ場所、学び場というのを考えた市があるかと思ひませう。この場でこうしたらどうかというのではなくて、いずれ何年か先にも役に立てばいいなというふうにと思ひませう、ちょっと言わせていただきました。以上です。

委員長 ファジーな地区、先ほどの調整地区、どこにあるんですか。

委員 伊勢です。

委員長 教育で大事なことは、選択肢があるということは結構大事なんですね。もうここはここしかないんだよ、これはこれしか食べちゃいけないんだよということじゃなくて、栄養の面も給食とかは何かあると思うんですけども、これからの人生育っていく上で、いろんなところを選べるというのが大事なことだかと私は思ひませうんだけど、子供がそれで、小学校へ上がる前にそういう能力があるかどうかというのは難しいところなので、やはり東京の品川区でしたか、選択制になっていますよね、どこの学校に行くかは。だから、学校が来てくださいう、こういうメリットがありますよと、すごく過当競争になっているという話も聞いたんですけども、その学校は人が来なかったら廃止しますよみたいな結構過激なことをやっているわけですけども、私も調整区といいませうか、そのあたりが、保護者の選択肢によってできないのかなあということはずうっと思ひませうですね。

危ないから、1号線とか線路を渡らせないで、こっちの近いところに来ると。もう毎日のことですからね。そういうことを選択肢が本当にできるようなことができないかな

あとということはずうっと思っっているんですけども、やはり区割りといいますか、自治会の区の強制力というのはかなりあって、この委員会もそのところで結構もう障壁になっているんですね。だから、そのところは何とかならないかなと思う。学校の教育と地域のコミュニティーというのは一緒にできやいけないのかということも、ずうっと思っっている。

委員 自治会と子供会といえ、その自治会の子供たちはみんなかわいいので、できれば同じようなところで何でもやりたいなという気持ちはわからないではないですが、自治会によって、それは大分考え方も違うと思うんですよ。栄南地区のいわゆる南のほうとか、1号線の上の北のほうの弥富の市民の方とは多分発想が違って、南のほうはとにかく近いところへ行きたいというような発想なんです。弥中しかなかったの、弥富中学校へ通っていると。飛島中へ行ってもいいよと言われれば、みんな行っちゃうんじゃないですか、やっぱり近いというのはメリットですから。

でも、この会は弥富市の小・中学校の適正規模検討委員会なので、この委員会としては、やっぱり適正な規模というのは、弥富市に3つの中学校があったら、ある程度、人数が少な過ぎるとデメリットが多いと。なので、最低150人か200人はいたほうがいいという結論を出して、あとどの地域の子が通えばいいかというのは、最終的には行政の仕事だと思うんですよ。なので、この会はこういう規模がいいんですというふうに答申すればいいんじゃないかなあと思いますが。

委員長 そうですね。そうだと思いますけれども、ある程度、方法論といいますか、具体策も何例かは出さなければいけないのかなということだと思います。

委員 自治会の活動をやっていると、やはり中学校になるとどんどん自治会がかかわる用件はほとんどありません。その地域の催し物、近々地蔵盆とか、その後、お祭りとか、あるいは運動会とかいろんなことがあるんですけども、そういったところで小学校に上がる以前から、地域としてはすごくかかわっていますけれども、先ほど申し上げたように、桜小学校ができたときに、たしか1号線から南で分かれたんです。

1号線の南側は桜小学校、あれより北側は従来どおり弥生小学校というような分かれ方をしたと思うんですね。今回、十四山と弥富のところに、そういった物理的な大きな境目というのが同じようにならないような気もするんですけども、ここの中でいえば、三百島の少数のところがありましたけれども、この辺のところはどちら側へ行ってもいいというような、先ほど委員の方がおっしゃったように、調整地域で個人個人がどちらか選べというようなこともあろうかと思うんですけども、ただ東平島というのは、西平島と別々の自治会ですか。

委員 区長さんは両方出ている、どっちかが一人。

委員 1つで、区長さんは1人ということですか。

教育長 いえ、お2人です。平島という形の中で、西平島、東平島の区長さんがお2人。

委員 お2人お見えになるわけですね。

どうでしょうか。生徒の数というのは、現在は東平島は非常に新しい家が多くて、非常に急速に生徒数といいますか、子供さんの数がふえた気がいたしますけれども、これ



から将来になったら、またどうなるかわかんないですよ。ですから、その都度都度、余り重く考えずに、あるところで割り切って、どちらにしても無理があるというような反対意見もあろうかと思しますので、今現在、例えば10年後とか、そのぐらいまでを視野に入れたところのより合理的な方法を多数決をとれば、恐らく半々になるかもしれませんです。ですから、そこは専門家の方のいろんな見識をもって案を1つ固めれば、それに行政のほうの立場で矛盾を最小限度にして、知恵を足していくということで、今回のテーマは何らかの出口が見えるのではないかというふうに私は思います。

委員長 ありがとうございます。

栄南地区は、今でも十四山中学のほうに近いですか、どうなんですか。余り変わらなくなりましたか。

(「今は弥中のほうが近くなります」の声あり)

委員長 弥中が近くなるんですか。

(「そうなっちゃいますね」の声あり)

委員長 以前、佐古木の白鳥のことも出ましたよね。1号線、踏み切りを超えて行かなきゃいけないと、どうなんだというのがあったんですけども、旧十四山の子たちは、1号線とかを向こうからこっちへ来ることは、三百島の子たちだけですよ。

(「そうですね」の声あり)

委員長 区長さんたちにはいろいろ御示唆をいただきまして、10年後というちょっと長いんで、早いところ答申を出さなきゃいけないなと思うんですけども、議論がいろいろ煮詰まってきましたが、視点は、やはり子供たちの安全・安心、ここが一番のところではないかなと思います。大人の論理ではなくて、やはり子供たちの目線とおっしゃいましたけど、そこを中心に考えていかないといけないだろうと。

それともう1つは、ここの地域性ですよ。この地域性、防災、これも安全・安心につながるとは思いますけれども、東日本大震災のときのあの教訓を生かしていかないと、この地域も大きな禍根を残すことになるのではないかなということは思います。だから、議会の人たちがどう説明したらうまくいくかということもちょっと頭の片隅に持ちながら、そういう視点で、どうしたらいいのかということも考えていかなきゃいけないと思います。建物を新しく建てるということになると、とてもお金がかかることですので、行政区、遠い近い、いろいろありますけれども、できれば行政区をもう思い切って振り直しなんていうのがどこかでできるといいんですけどね。学校区と行政区のマッチングというのは、今の現状ではなかなか難しい、このまうまくバランスをとるということになる。

そういう視点で、親御さんたちにアンケートをとるというのも一つの方法ですが、そこまで行っちゃうと難しいんですかね、そのあたりは。

教育長 5年後を見据えますと、今の保育所の母の会という保護者の皆さんにアンケートをとる方法が一番いいのかなあと今思っています。今の小学校、中学校の保護者よりも、3歳前後といいますかね、その辺の保育所の母の会を対象にアンケートをとる方法は一つありますね。

委員長　　そうですか。

小学校区から、それはかわるということになりますか。小学校からかわってくるということに、どうなんでしょうか。

教育長　　一応は、中学校区に絞り込んだらの話です。

委員長　　絞り込んだ話ですね。中学校は今一応さわらないそうですので、小学校はみんな歩いていきますから、やはり小規模校になっても近いほうが良いという話が出たんです。でも、中学校は自転車で移動しますから、若干、横目で飛島中学を見ながらこっちへ来るというのもしようがないかなということも考えてはいたので、中学校はよろしいんじゃないですかということで話は進めますけれど。

それと、調整区という新しい提案が出たんですね。ファジーなところ、要するに境界のところですよ。そこで、どう動いていくかということの選択肢がとれるかどうかということですよ。そのところが可能なかどうかなのか、そういうことが。そのところが可能であれば、逆に言ったら、鳥ヶ地の子は弥富中学に行きたいという人もいるかもしれない、これはね。なかなか難しいんですね、これは、調整区を全部するつもりだと、あっちのほうが新しいからあっちへ行きたいなみたいな話で。

委員　　いや、そういうことはないです。僕は半々なのかわかんない。やっぱりきれいなところがいいという人と、十四山だし、平穏なところがいいという親御さんがやっぱり根強いというか、その辺はやっぱりアンケートがいいのかどうかわかりませんが、僕がちょっと世間話をした感覚だと、やっぱり最新とは言いませんけれども、きれいなほうがいいという、親御さんでいうと30代ぐらいの方だと、私もちょっと世代的にも大分変わってしまいますので、感性がちょっと違うと思うんで、ちょっとなかなか断言しづらいですね。

委員　　ちょっと議論に火をつけた気がしますが、私のもともとの意見というのは、案5に賛成で、これを進めていけたらなと思っているわけです。

それから、留意事項ですね、丸が4つありますけれども、この防災関係について話が出てきました。それから、この委員会がもう完全に終わって、次の段階に進んで、何年かした後に、東平島あたりの小学校について調整ということはどうかということで、将来を見た場合ですので、この今回の調整委員会について反映させろというものではありません。

この中学校のこの調整が終わった後の何年か先の話でございます。

委員長　　いずれにしても、もう絞り込まれているのは、今回の経過説明にあったところが恐らく主になっていると思うんですよ。あとは、やっぱりどういう視点でそれを肉づけして提案していくかということになるかなと私は個人的には思っているんですけども、平島だけが争点になっておりますけれども、三百島も含めて、これから思い切って、そのあたりを区切りというのをどうするかということを考えていかなきゃいけないのかなと思います。先ほどの過去、いろんな経緯もございまして、合併した経緯だとか、いろんな話を聞かせていただいて。

そのときは、急に、こっちの学校だったけど、こっちにかわったということはあるん

ですか。

委員　　そうですよ。

委員長　急に学校がかわっちゃったということになるんですか。

委員　　途中からです。

委員長　途中からかわったんですか。

委員　　そうです。2年生で編入とか、1年生で編入とかということ。

委員長　やるとなったら、もうそれが一番いいとは思いますがね。順番にかわっていくというのは結構難しいのかなと思うんですけど、ここからこっちにドラスティックにやるというのも、結果的にはうまくいくのではないかなと個人的は思っていますが、その決断は我々がするところじゃないんで、どういう方法でやるかは決めていただいたらいいかなと思います。

　　ちょっと時間が来ましたが、まとまりのないところで、きょうは終わってしましますが、いろいろ御意見をいただいたということで、最後、オブザーバーの先生のちょっと話を聞いて。

委員　　オブザーバーですので、もとより私の意見を述べるという場ではありませんが、まづもって、委員の皆様方、本当に真摯に子供たちの教育環境、学校規模の適正化ということでお話をいただきましたこと、本当にありがとうございます。

　　この問題は、人によって100点満点はないと思いますね。もう最終的にはやっぱりある程度の決断をしていかなきゃいけないという問題ではあるかと思いますが、教育には2つの大きな面があると思います。1つは、子供たちの教育というのは、大きなスパンで見ていく必要が、昔、教育は国家百年の計だということで、そういった例え話もあったわけですが、今の現状をどう見ていくかということと、10年後、20年後をどう見ていくかという、あるいはもっと先の30年、40年先が弥富市の教育の学校規模といったものをどう見ていくかという問題。

　　それから、もう1つの側面は、子供たちの後ろに見える親御さん方の意向、あるいは地域の意向、こういったものも非常に大きな要素を持っていると思います。子供たちは、地域と学校が連携して育てるとというのが基本でありますので、そういった意味で、地域の方々やっぱりある程度、うんと言わないとなかなか難しい側面がございます。

　　ですから、そのところをどういうふうにしていくかということが大変難しいわけですが、今お話の中であったように、学校規模の適正化といった観点から見ますと、基本的に今進んでいる方向が望ましい方向なのかなあというふうに私も考えます。統合して2つにするという考え方も前あったわけですが、やはり1,000人規模の中学生がいる中で、3校という一つのスタンスが望ましい。今、お話しいただいた形で、いろいろ御意見がある中で、それをどういうふう調整していくか、このところがこれからの委員長さんの手腕になるかと思いますが、基本の考え方だけは逸脱しないというか、忘れないようにして、ぜひより実効性のある結論を導いていただけたらありがたいなあと思っております。あと一、二回、そういった会があるかと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

委員長    どうもありがとうございました。  
             それでは、本日のディスカッションはこのあたりにします。